訪れたい。わが藩祖高政公の先祖の地であり、中島子爵らが筆を負うて留学した広瀬淡窓の私塾咸宜園のある文教先進の地である。その外佐伯市内、周辺郡部でも本西村中野地区が殆んど残っているし、新しい会員の方々に出来市にも行きたい。何と云っても歩いて見聞を広めることである。

ふるさとの移ろふもうしふるさとの
かわらぬもうし　はしきふる里

これは三の丸の庭にある中根貞彦先生（今は故人）の歌碑にある歌である。はしきは愛すべきという義である由、その故里が恐ろしい勢いで変りつつある。私共は今佐伯市はもとより、南海部郡全域（勿論宇目町迄含む――旧藩時代は岡藩に属してはいたが、それ以前は佐伯氏の勢力圏内であったようだから）それに津久見市の迄久見浦以南へもと佐伯藩領）を郷土史研究の対象としているが、今日に日に変貌しつつあるところもあれば、昔ながらの山の姿、川の流れ、農山村の静かなたたずまいを見せているところもある。いずれにしてもはしきふるさと里である。毎日の新聞、特に地方郷土紙には、その移り変る郷土の姿が写真入りで報道されている。それは貴重な郷土の現代史の資料でもある。これの資料に接する度に私共の足でたしかめる、歩いて学ぶことの、まだまだであることを感ずること切である。

然し私共会員は勤めをもち、家業をもっている。仕事を放って歩きまわるわけにはいかない。ここになやみがある。機会は向こうからやって来ることもあるが、本会としては努めてその機会をつくり、会員多数が相携えて現地研究に出歩きたいと思っている。

今年は一層の精進研究がなされるよう祈るや切である。（以上）

研究

毛利氏の女系について

会員　佐　脇　貫　一
（佐伯市　津志河内）

佐伯藩祖毛利高政は尾張国愛知郡の人で、本姓は森氏、父を毛利左衛門高次といったということは毛利氏家系に明らかであるが、いつ森氏をどういう理由で毛利氏に改めたかは明らかでなく、伝承は中国毛利氏の人質となり、その勧めに従って毛利氏に改めたへ温故知新録・鶴藩略史・佐伯茶飲話）ことになっているが、秀吉旗下の将士で森吉成・森勝信などが、いずれも毛利氏に改め、また黒田長政の家臣母里太兵衛が『毛利但馬』と称したことを考えると、森、母里、竹などが『モリ』と読む苗字の人々が、中国地方の大名であった大氏毛利氏にあやかって毛利と改称したのは、当時の武人の単純な考え方から生れた慣例のようである。

毛利高政の父は高次、やはり秀吉旗下の家士であった。母は瀬尾氏、尾張海東郡の郷士瀬尾小太郎の女であったという。鶴藩略史は高政の出生について

『或は豊国公の庶長子と伝ふ。初め豊国公微なる時、瀬尾小太郎と親善なり。その女を子へ公を生み、因て偏諱を賜りて高政と命名す。（当時豊公木下藤吉郎高吉と称す）女、後に森高次に嫁す。』

と伝え、高政が秀吉の庶子であったから、天正十年六月の羽柴・毛利の和睦にさいし、高政、吉安の兄弟が毛利方へ人質に遣られたのだと、高政の毛利氏改姓の伏線に

している。

若し高政が瀬尾氏の連れ子であったならば、豊臣時代における高政の女系はもっと高く評価されてよい。秀次、秀長などのように天正十五年ごろには参議、宰相の位につき、十万石以上の大名になったはずである。豊後遠野には何によってか瀬尾氏を、上杉不識庵（謙信）の孫女であるると伝えている。これは恐らく謙信の本姓である長尾氏が瀬尾氏（分尾氏）と別族の相武平氏鎌倉氏族（瀬尾氏は梶原氏の子孫という。）であったため誤り伝えられたものと思う。法雲院（高政の母）は寛永四年三月四日佐伯で歿している。

徳川幕府は諸大名を統率するため、武家法度を定めたが、とくに諸藩の嗣子なきものに対しては、これを絶家させる政策をとった。毛利氏では二代高成が歿して嗣子市三郎が幼弱であったため、家中が二派に分れて争論したが、家老並河信吉の策謀によって事なきを得た。また四代高重は病弱で嗣子がなく、天和二年四月その急死によって家名断絶の瀬戸際に立たされたが、執政戸倉甫重らの巧妙な立ちまわりで、豊後森（一万二千五百石）藩主久留島通清の三男叡負を養嗣子とした。（五代高久）なお六代高慶は高久の同母弟（通清の五男）である。

▽末島通総——康親——通春（久留島と改む）

通清——通政
　　叡員（高久）
　　千代熊（助十郎高定、高慶）

分くて毛利氏の家名は無事継続し、十二代を経て明治維新にいたったが、十二代晶謙にまた男子なく、夫人細川氏（美女子）の甥田肥後守土藩主細川行真の子侃次郎を養子とした、これが十三代高範（子爵）である。

▽細川忠興——忠利（熊本藩主）
　　女子（島津後室）
　　立孝（九代藩）—立則—行真（高範）
　　侃次郎

そこでまず高政、高成、高尚、高重四代の女系であるが、高政はすこぶる晩婚で、夫人木曽氏が長子勘八郎（高成）を生んだのは慶長八年で、高政四十五歳の時であった。

（鶴藩略史）慶長八年夫人木曽氏（信濃高島城司伊豫守木曽義昌二女）世子を佐倉に生み、勘八郎と称す。初めて夫人の娶める者より、公、大宮八幡祠に祈りて男子を得。

高政に関する記録に見える少ぎり、高政は戦国武人のように単純で剛直な性格の人物だったが、秀吉の手元で育っただけに丈様で派手な一面ももっていた。記録には明らかでないが、夫人の外に側妾も何人かあったようで、鶴藩略史寛永四年八月十五日のところに『二子高明（幼名次郎八、後に数馬と称す。生母吉田氏）家老に列す。』とあり、吉田氏という側妾が二男高明の生母であったことを記してある。高政には四男二女があったが、高成、高明の母かは生母が明らかでない。夫人木曽氏は信濃高島城主木曽伊豫守義昌の女で、義昌は武田氏のため伊那谷を追われたが、慶長年間その子義利が下総阿知戸一万石に封じられた。木曽氏は源義仲の後という。

▽木曽義仲——義基——義茂——基家——
　　家仲——（千代熊）——義康——義昌——女子（高政室）
　　義利（福寿院）

毛利氏二代高成（根津守）夫人は、信濃飯山城主佐久間備前守安政の三女、この安政は剛勇きもつて聞こえた佐久間玄蕃允盛政の末弟、盛政の最期につくした縁故で高政と良く、その女子を高成に嫁すことになつたという。高成夫人佐久間氏は二男二女の母となり、延宝八年五月七日病歿した。（清光院殿玉雲宗白尼大姉）

▽三浦義明―義春―（佐久間）家村―（和田常盛の子）朝盛…（六十四代略）

盛通―盛重―盛次―盛政（備前守、飯山三万石）（家督元）
　　安政―安長
　　女子（高成室）

（鶴藩略史）寛永八年夫人佐久間氏世子を生む。市三郎と称す。

市三郎は三代高尚の幼名である。父高成が三十歳で歿したため、年僅か三歳で家督を継いだ。慶安元年十八歳のとき伊勢守に敍任され、承応二年四月、二十三歳で牧野佐渡守親成の女を娶つたが、数年後離婚した。

▽牧野康成―信成―親成―女子（高尚室）

牧野親成は承応三年から寛文八年まで京都所司代をつとめた幕閣の有力者、その女だけに『故ありて去る』と書かれた記事が気になる。高成には佐伯に側妾があつた。萩野友宗の女で名は初子。寛文二年三月世子主膳を生んだ。牧野氏去りて後正妻になつた高尚にとつて、萩野氏はもつとも寵愛する側妾であつたらしい。

四代高重は幼名主膳、寛文二年三月十八日佐伯に生まれている。同四年八月父高尚が歿し、同年十一月三歳で封を襲つた。延宝四年十二月安房守に任ぜられ（年十五歳）、天和二年二十一歳のとき、下総小見川藩（一万石）内田出羽守正衆の女を娶り夫人としたが、この年四月白杵藩主稲葉右京亮景通の江戸邸に招かれ、たまたま病を発し、同七日急逝した。夫人内田氏は未だ輿入れを辷ず死去に会つた。内田氏は三河譜代である。

▽勝間田正利―（内田）正之―正成―正世―
　正信―正衆―正倫
　女子（高重室）

高重の生母萩野氏は元禄三年四月十六日歿した。（自照院殿霊応宗鑑尼大姉）

五代高久（駿河守）は森藩主久留島信濃守通清の第三子、生母は安部氏と伝えられている。天和二年四月、十六歳で先公高重の養嗣となり、同年六月襲封した。（鶴藩略史）貞享三年十二月十三日在奥盛所藩（二十万石）南部信濃守行信の女満久子を娶りて夫人となす。貞享四年五月十九日、夫人南部氏去る。

▽南部信直―利直―重信―行信―女子（高久室）

高久は性来病弱で結婚生活に耐えきれぬ体質であつたらしい。そのため夫人南部氏と離別した翌元禄元年七月、森にあつた同母弟助十郎（千代熊）を迎えて嗣子とした。（以下次号）

（余白―編者附記）

○初代高政夫人水谷氏のお墓は藩祖の廟舎に向い合う東芝寝屋の中にあり、小さな五輪塔である。

○二代高成夫人佐久間氏のお墓は門を入つて右に三基ある一番向う、即ち藩祖の廟に近い大きな五輪塔である。

○三代高尚夫人（離婚）はなく、側室萩野氏、即ち四代高重の生母のお墓が正面中央の列右より五番目に建つている。

（いずれも養願寺水堂裏毛利家墓地内）